

社会統合モデルとしての「British Muslim」

——移民第二・三世代ムスリムのアイデンティティ——

近畿大学 安達智史

1 目的

本報告の目的は、イギリスの移民第二・三世代ムスリムが、宗教的アイデンティティを維持しつつ、どのようにイギリス社会に統合しているのかを探究することにある。その際、社会学者・政治哲学者タリク・ムドゥードによって提示された「British Muslim」という枠組みを参照する (Modood 2013)。このモデルは、移民第二・三世代ムスリムのアイデンティティ形成やそのために不可欠な承認の政治が、イスラームそれ自体だけでなく、イギリスの社会的価値や政治的ディスコースを活用することで実践されている点を強調するものである。だがムドゥードは、具体的な事例の分析に基づき、この枠組みの意義について議論をおこなっていない。そこで本報告では、実際のインタビュー・データの分析を通じて、「British Muslim」というモデルの内実を明らかにするとともに、それがもつ積極的な意義について検討する。

2 方法

データは、2009年から2015年にかけて、イギリスのコベントリーおよびロンドンでおこなわれた、およそ100名の移民第二・三世代ムスリムへのインタビュー調査に基づいている。インタビューでは、「イギリス人であること」と「ムスリムであること」の関係について主に聞き取りをおこなった。

3 結果

分析の結果、次の点が明らかとなった。第一に、ほとんどのインフォーマントは、イギリス人であることを自明なものとしてみなしているが、それは文化よりも、出生の事実や法的な地位とかわる概念として認識しているためである。第二に、イギリスの文化とイスラームはしばしば対照されるが、それらは「生き方／生活様式 (ways of life)」をめぐる選択の問題としてとらえられている。だが、第三に、イギリスの社会制度（特に教育制度）を積極的に評価しており、そこで得られた知識や価値を肯定的に受け入れている。（第三の結果として、）第四に、インフォーマントは、インタビューにおいてイスラームの積極的側面を説明する際、「平等」「自律」「民主主義」といった西欧社会において公的に認められた価値に言及している。それは、イスラームが西欧社会と適合的であるだけでなく、そうした市民社会の価値にイスラームが重要な貢献をおこなっている点を強調するためになされている。

4 結論

以上の結果は、ムドゥードによる「British Muslim」というモデルが、比較的高い妥当性を有していることを示している。ここで「British Muslim」とは、イギリス社会の価値や生き方／生活様式に同化したムスリムでも、単にイギリス社会で暮らすムスリムという意味でもなく、イギリス社会と積極的なつながりを持ち、またそのなかでこそ意味をもつイスラームの教えを構築するムスリムを指している。こうしたムスリムのあり方は、イスラームをめぐる主流の政治的言説が誤りであるだけでなく、イスラームが共通のシティズンシップ (=市民的特性) の形成に貢献しうることを示唆するものとなっている。

文献

Modood, Tariq, 2013, *Multiculturalism*, second ed., Cambridge: Polity Press.